

さぶりめんと

グリーンライトレーザー治療のご紹介

泌尿器科 川端 岳

このたび、前立腺肥大症に対する新たな手術治療法として、最新型のグリーンライトレーザーシステムを2012年1月に導入しました。日本では現在5台が稼働中で、関西地方では初の導入となります。



前立腺肥大症とは？

膀胱の下にある前立腺が肥大して、尿道を圧迫し、尿の切れが悪い、出にくい、頻尿などの排尿障害を起こす病気です。中年以上の男性がかかる最も多い病気の一つです。

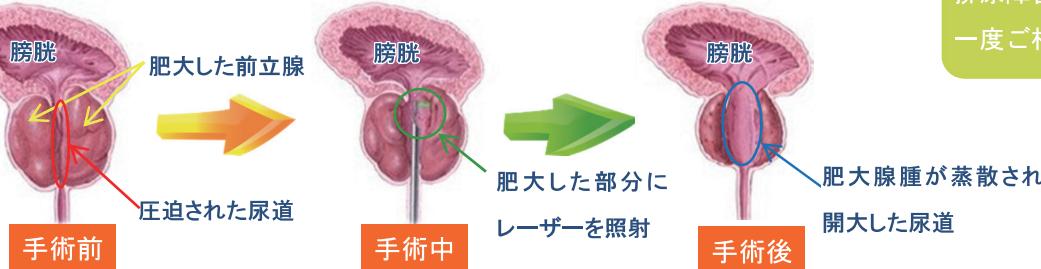
前立腺肥大症の治療とは？

大きく分けて、薬物療法と手術療法があります。症状が中等度までの患者様は、お薬で症状が軽減されますが、重症の場合には、手術が選択されることが多く、現在は主に電気メスを用いる経尿道的前立腺切除術(TUR-P)が行われています。しかしこの方法は、出血などの問題や、術後3~4日間尿道に管(カテーテル)が入るため、1週間以上の入院が必要です。このような背景から、“より患者様に優しい治療を”とのコンセプトのもと、グリーンライトレーザーによる光選択的前立腺蒸散術(PVP)が開発され、2011年7月に保険適応を受けました。

最新のグリーンライトレーザー治療とは？

PVPでは、ほとんど出血せずに前立腺を蒸散(組織が一瞬に蒸発して気体になり消滅)することができ、輸血の心配もありません。脳血管障害や心疾患のために、抗血小板薬や抗凝固薬を飲まれている患者様にも、比較的安全に受けさせていただけます。手術時間は約70~90分で、術後の患部の腫れがほとんどないため痛みが少なく、入院期間も数日と短くなります。なお、本手術は欧米では広く普及しており、50万人以上の治療実績があります。安全かつ副作用の少ない治療法で患者様の満足度も高く、他の手術療法が出来ない患者様においても施行可能と考えております。

PVP手術の実際



排尿障害でお困りの方は一度ご相談下さい。



ひとりで悩まず相談を！



下肢静脈瘤とは



伏在型静脈瘤

網目状静脈瘤

クモの巣状静脈瘤

足の表面にある静脈が拡張し、こぶ状の血管や細かい血管浮き出て目立つようになった状態のことです。まれな疾患ではなく日本人では約10人に1人に下肢静脈瘤があるといわれています。

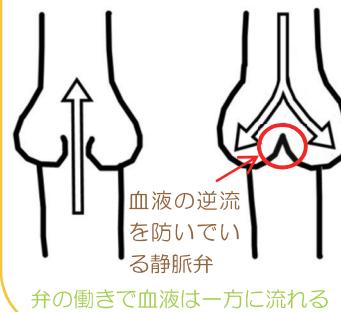
下肢静脈瘤の症状

自覚症状としては足のだるさ、むくみ、かゆみ、ほてり、こむら返りなどがありますが、静脈の拡張があっても、自覚症状に乏しい場合もあります。下肢静脈瘤が進行するとふくらはぎに皮膚炎や色素沈着をおこし、ひどくなると皮膚潰瘍になることもあります。

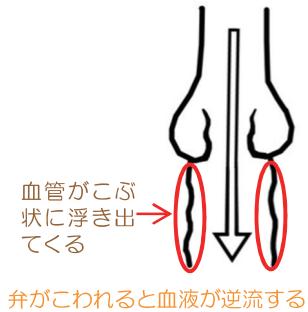
下肢静脈瘤の原因

血液を心臓へ戻す血管である静脈には、血液の逆流を防ぐ弁があります。下肢の静脈弁の働きが悪くなると、血液は重力の作用で上から下へ逆流を起こすようになり、たまたま血液の圧力で静脈が徐々に拡張して下肢静脈瘤を生じます。一度悪くなった静脈弁は元通りにはならず、血液の流れが悪くなることで様々な症状を引き起こします。

正常な静脈



弁が壊れた静脈



下肢静脈瘤の治療

圧迫療法

伸縮性のある医療用の弾性ストッキングを履くことで拡張した静脈を圧迫し、逆流した血液が流れ込むのを防ぎます。下肢静脈瘤が消えて治るわけではありませんが、血液循環が改善し、だるなどの症状が軽減します。



ハイソックスタイプの一例
医療用弾性ストッキング

硬化療法

拡張している血管に硬化剤と呼ばれる薬剤を直接注射し圧迫することで、静脈をつぶして固める治療です。1回の治療は15分から30分程度ででき、外来通院で行えます。



薬剤注入の様子

ストリッピング手術

ワイヤーを通して逆流を起こしている血管を取り去る手術です。最も多いタイプである伏在型静脈瘤に対する標準的治療です。当院では腰椎麻酔による手術、4~7日程度の入院で治療を行っています。



手術前



手術後

下肢静脈瘤は適切に治療を行い、症状を緩和することで快適な生活を取り戻すことができます。また見た目の問題も治療の理由になります。当院では超音波断層検査等を行い、患者様と相談のうえ治療方針を決定していきます。思い当たる症状がありましたら受診いただき、お気軽にご相談ください。

※レーザー治療は現在当院では行っておりません。当院ではより治療成績の安定しているストリッピング手術で高い治療効果を得ています。



独立行政法人 労働者健康福祉機構 関西ろうさい病院

尼崎市稻葉荘3-1-69 TEL 06-6416-1221(代)

H P <http://www.kanrou.net/>

携帯版H P <http://kanrou-mobile.jp/>

ブログ <http://kanrou.blog106.fc2.com/>

発行人 林 紀夫 編集人 堤 圭介

